

# インド北西部ラダックにおける農村社会の変化とその要因 ～衛星写真とフィールドワークを利用して～

京都大学文学研究科 神品 芳孝

## 山地という環境

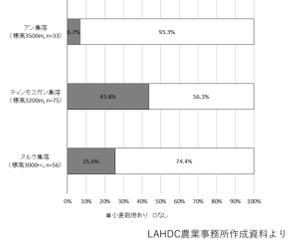
- 農業の生産性が低いにもかかわらず、閉鎖的環境であることから、自給自足的農業を行い、生活を維持してきた。
- 市場経済化の波が押し寄せると、農業よりも現金収入の得られる職業（農外活動）が志向される。
- しかし住民は農業をないがしろにしてはいないといわれている。
- 本研究では、インド共和国のラダックにおいて、インダス川支流沿いの標高の異なる3集落を事例に、集落の立地とオオムギ・コムギの栽培比率の関係および住民の就業形態・居住形態とを比較し分析する。このことによって、市場経済化の中に取り込まれた農村の変化が集落の立地によって異なることを明らかにする。

## 調査内容

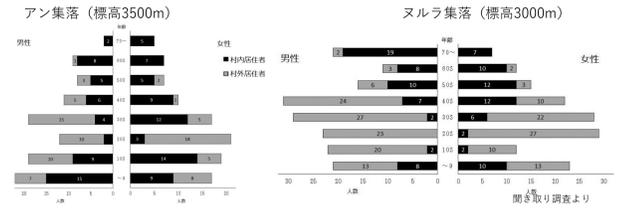
- インダス川支流沿いに立地する、ヌラ集落（標高3000m）、ティンモスガン集落（標高3200m）、アン集落（標高3500m）にて畑地所有世帯のうちコムギを栽培している世帯数の割合を調査した。
- ヌラ集落とアン集落において、住民の居住地と職業（農外活動）を調査した。
- また、ラダックの7割近くの住民が農業に従事していた1972年と、農業従事者が住民の3割以下となった2018年の畑地と樹林地の分布を調査した（Corona衛星写真（1972年5月撮影）とWorldView-2衛星画像（2017年6月撮影）を使用した）。

## コムギの栽培を行う農家

- アン集落は標高が高く、気温が低いためコムギの栽培には向いていない。
- ティンモスガン集落になると標高が下がるため、コムギを栽培している農家の割合が増えるが、
- 更に標高の低いヌラ集落では一転して割合が低下する。

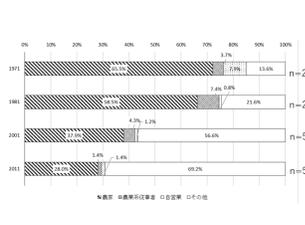


## 村内居住者と村外居住者



## ラダックの住民の職業

- 社会政治的变化（インド政府の国防上の思惑、食物の配給、観光業の発展など）によって自給自足的農業システムは衰退している。
- ラダックの住民の職業を見ると、1971年のセンサスでは70%近くいた農業従事者が次第に減り、2011年のデータでは30%以下まで減少している。



1972

- Indus River
- River
- Woodland
- Field

2017

- Highway Road
- Road
- Indus River
- River
- Woodland
- Barley
- Barley to Vegetable
- NIL
- Vegetable
- Wheat

## 消えゆく農業方法のひとつに

- チベットの伝統的な占星術による日程の決め方がある。
- チベットの考え方は宇宙は水圏、地球圏、火圏、空圏という要素で構成される自然科学的部分と、木圏、水圏、地球圏、火圏、鉄圏という要素で構成される人文科学的部分に分けられ、農業や結婚式の日程などを決めている。



## 考察

- ヌラ集落の住民の中で、仕事のある平日はレーで仕事をこなし、週末だけ出身集落に戻って農作業を行うという世帯が数世帯あった。
- アン集落の場合は交通の便が悪いため、集落外に住む者が農作物の生産活動を行うことは困難である。
- ヌラ集落の場合は若いうちから集落内で農業生産活動を行うことができる。
- アン集落の場合、出稼ぎのために村を出て行った集落出身の若者が、土地を所有し、集落内で農作物の生産活動を行うタイミングは定年を迎えて職業を退職したときであろう。

- こうしたなかで、幹線道路沿いに立地している集落では、住民は出稼ぎ労働を行っているうちから農地を持ち、そこで手のつかない作物を栽培するようになる。よって、果樹園が中心の農村景観となることが予想される。
- 一方で幹線道路から外れた集落では、農地を持つのは定年退職した後である。よって、主食であるオオムギなどを栽培する、現在見られる農村景観が残ることが予想される。
- 集落の立地によって今後の農村景観が異なる形へと変化することが示唆された。